

島根県の排他的経済水域内における 底生水産生物の資源動向とその利用に関する研究

(第2県土水産資源調査)

為石起司・古江幸治・若林英人・森脇晋平

1. 研究目的

国連海洋法条約の批准により生まれた本県沖合の広大な排他的経済水域「第2県土」には、大陸棚が広がり、日本海でも有数な生物生産の場となっている。しかし、従来は外国船との競合などから本県の漁船はこの海域を漁業生産の場として必ずしも十分に活用していなかった。そこで、本海域の水産資源、特に底生生物を中心とした生物資源を調査し、未利用資源の開発ならびに底魚類のTAC管理を実施するための基礎資料を得る。

2. 研究方法

(1) ズワイガニ資源調査

隠岐諸島周辺海域におけるズワイガニの資源状態を把握するため、かにかごによる試験操業を実施した。調査は現在かにかご漁場として利用されている隠岐諸島西海域を対照区として1定点、未利用海域である隠岐諸島北西及び北側の海域で各2定点ずつ、合計5定点で行った。試験操業は、試験船「島根丸」で平成15年7月1～3日、7月7～10日の2航海実施した。使用した漁具は1連(かご数37個)、餌は冷凍サバを用い、かごの浸漬時間は約15時間とした。

(2) 敬川沖トロール調査

江津市敬川町地先沖の水深60m、80m、100m、120mに定線を設定し、試験船「明風」によるトロール網の操業を平成15年6月23・24日、11月5・6日、平成16年2月10・12日に実施した。曳網時間はそれぞれ30分間とした。

各調査とも操業点においてSTD(アレック電子)により水温・塩分を観測した。また、漁獲物は殻幅、体長、個体数等を測定した。

3. 研究結果

(1) ズワイガニ資源調査

隠岐諸島の北西海域での調査では、対照区と比較してもオスのズワイガニの漁獲状況は遜色なく、新規漁場となりうる可能性があると推測された。しかし、隠岐諸島の北海域での調査では、オスのズワイガニの漁獲尾数が対照区の約1～2割程度で、殻幅の平均サイズも小さかった。

(2) 敬川沖トロール調査

島根県沿岸域における底生生物の平成元年以降の変動を見ると、オキトラギス、シビレエイ、ヤリイカなど減少傾向にある種類、ソコイトヨリ、ヤナギムシガレイなど増加傾向にある種類がいる事が分かった。

4. 問題点

ズワイガニ資源調査では、隠岐諸島の北海域での調査結果が良くなかったが、2回の操業の内1回は、ばいかご漁と漁場が近接していた等の問題点があった。さらに全体の調査定点が5点と少なく調査精度に問題があると考えられる。